



今号は公開研究会の講演内容をまとめました。学園祭が終わり、2学期後半の学習がスタートする今、講演内容を振り返りこれからの授業づくり・授業改善に生かしてもらえたらと思います。

公開研究会 講演

「一人一人が学んだことを実感し、自ら行動する姿を目指した授業づくり」 茨城大学教育学部 教授 新井英靖氏

<講演 要旨>



「何を学んだか」から「どのような力を身につけたか」へ

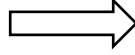
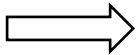
○予測困難な社会の変化に対応できる子どもを育てなければいけない。

- ・情報を再構成して、こういう風に使えろという新たな価値につなげる姿
 - ・複雑な状況の中でも、こうすればいいんだという目的を再構築する姿
- だから、今現在必要な力を経験的・体験的に学ばせるだけでは不十分である。

どのような時代でも活用できる資質・能力を育てる必要がある。

○これまでは、何を学ぶか、どのような活動で学ぶか、が重要とされてきた。

これからの時代は、何を学んだかではなく学習活動のなかでどのような力を身に付けたかに焦点を当てる必要がある。そもそも何を身に付けたいか？を整理するところからスタートする。



20年後は？



切符を買う
練習は必要？

キャリア発達の視点で授業をつくる

○「自分から行動する」ためには、キャリアを蓄積していく視点が大切。

生活に必要なスキルを身に付ける
+ (プラス)

役割を果たす ← 「任せたよ」「できる？」人との関係性のなかで

仕事の価値を見出す ←なぜやるのか、何のためにするのか、何につながるのか

立場や役割を意識させるための、状況づくりを。

○「実感する」ためには、子どもの内面を変化させるプロセスが大切。



できない、無理だ

意外と楽しいな



自信 新しいアイデア

立場や役割を与えられる

内面の変化

継続、発展

生活単元学習だけでなく、朝の活動や実習、特別活動など様々な学習場面に生かせそうです。

各学部の授業から ①中2 生単

- 知的障害の特性を踏まえ配慮された授業であった。見やすく・分かりやすく示す、具体的・实际的に活動する、といった指導内容は自立活動の視点が埋め込まれており、主体的・対話的な学びを入れた学習場面が設定されている。
- 「深い学び」について、「知」と「体験」の融合を。「お客さんに喜んでもらっている」ことを実感するには、どうしたらいいかを振り返るだけでは不十分である。認知的・行動的な理解だけでなく、感情的な部分を理解することが大事。分かっているけどできない、できるけどやりたくない、という感情が入ってくる。そこに子どもの感情が揺れ動くような意図的な仕掛けを入れていくと、思考力・判断力・表現力が身に付いていく。

このとき、お客さんの反応を受けてどのように感じたか？生徒の内面を理解して、次の学びにつながる仕掛けを！

話し合った通りにやってみよう。



各学部の授業から ②高3 生単

- 視覚化・構造化により役割分担が明確で生徒が何をしなければいけないのか分かっていた。手順表を作るなど特性に配慮され、自立活動の視点が入っている。
- ICTの有効活用も自立活動の視点であり、合理的配慮であると思われる。(この活動のように)「生じている事実を整理し、誰かに発信する力」は20年後も必要な資質・能力であろう。
- 画面を共有して「見る」、うなずきながら「聞く」などの活動は、対話的な学びの場面でもある。パソコンの活用を「視覚的支援」として捉えるだけでなく、友達との「共同的活動」を促す手段としても捉えることで深い学びへと発展させていける。障害を下支えしながら深い学びへとつなげる工夫を。



各学部の授業から ③小3 生単

- いつもの教室の雰囲気と違い、魅力的な「ぱるぷ」工場があることが児童の「やりたい」につながっていた。日常的な漫然としたものではなく、子どもが「やってもいいかな」と思わせる魅力的な、衝撃的な出会い（「セカイ」）を設定することがポイントである。
- 「手順や操作ができる」、「流れが分かる」など自立活動の視点が入っていた。ここができていないとやりたくなくなるので、自立活動の視点は下支えとして必要である。そこで終わらず、アクティブ・ラーニングの視点を。
- 手順や操作の習得に加えて、「どんなぱるぷをつくりたいか？」「そのためにはどうしたらよいか？」を自分で（又は教師と共同して）考え、試行錯誤する。その過程で思考力が育ち、20年後でも必要な資質・能力として身に付いていく。そのためには教材を「文化」として考えてほしい。普段とちょっと違う世界を作り出し、その中で想像力を広げられるように。子どもがその気になる演出を。

